

ミリウング・アイヌ言語文化交流プロジェクト

詳細報告書（2025 年 12 月）

背景

ミリウング・アイヌ言語文化交流プロジェクト（MALCEP）は、ミリマ・ダワン・ウラブゲリング言語文化センター（Mirima Dawang Woorlab-gerring Language and Culture Centre: MDWg）による取り組みであり、ミリウングおよびアイヌのコミュニティを代表とするオーストラリアと日本の先住民族間において、考え方や取組戦略の交流を促進することを目的としています。オーストラリアの多くの先住民族グループと同様に、アイヌ民族もまた、その言語が消滅の危機に直面しているという共通の課題を抱えています。

私たちの目的は、互いに学び合い、古来より受け継がれてきた貴重な文化遺産を守るための方策を共有することです。本交流の一環として、双方の主要機関を通じて、ミリウングおよびアイヌのコミュニティ代表者による相互訪問を実施しました。私たちは、公益財団法人アイヌ民族文化財団（FFAC）からの少人数の代表団を 1 週間受け入れるとともに、私たち自身もアイヌ民族の伝統的土地を訪問し、アイヌコミュニティの指導者たちと交流を行いました。

プロジェクト活動

1. アイヌ代表団によるカナナラ訪問

綿密な計画と準備を経て、本交流事業は、2025 年 3 月 30 日から 4 月 6 日にかけて実施された、アイヌコミュニティの代表者 2 名による訪問をもって開始されました。両訪問者の略歴は以下のとおりです。

山丸 賢雄（ケニ）氏は、アイヌの町である白老町に生まれ、コミュニティにおいて次世代のリーダーとして期待されています。若い頃にアイヌの伝統文化継承者を育成する 3 年間の研修プログラムに参加し、総合的にアイヌ文化について学びました。このプログラムを通じて、山丸氏はアイヌ語に関心を持つようになり、知識をさらに深めていきました。その後、STV アイヌ語ラジオ講座や町民向けのアイヌ語入門講座の講師を務めました。現在は、ウポポイ（民族共生象徴空間）にある国立アイヌ民族博物館および国立民族共生公園に勤務し、来訪者向けのアイヌ語プログラムの企画・実施を担当しています。

深澤美香博士は言語学者であり、ウポポイ（国立アイヌ民族博物館・国立民族共生公園）の国立アイヌ民族博物館に勤務する非先住民の研究員です。2017 年に千葉大学で博士号を取得後、国立アイヌ民族博物館の設立準備室に勤務しています。2020 年のウポポイ開設以降、同博物館において各種特別展・季節展示の運営、アイヌ語イベントや教育資料の開発、ならびに来訪者からのアイヌ語やアイヌ文化に関するオンラインおよび現地での問い合わせ対応などを担当しています。また、ウポポイにおける「アイヌ語タスクフォース」としてのアイヌ語チームの設立にも貢献し、組織内外における日常的なアイヌ語関連業務の管理を担当してきました。言語学者として、方言学や文献学を含む歴史言語学的アプローチからアイヌ語を研究するとともに、その再興および保存に向けた社会言語学的アプローチにも関心を持っています。

カナナラ滞在中、私たちのチームは、MDWg が実施しているさまざまな言語再興活動について来訪者に紹介しました。その詳細は以下の通りです。

- セレブリティ・ツリー・パークにおいて、ミリウング長老（マンタ）による伝統的歓迎儀式（Welcome to Country）を実施
- MDWg 職員による MDWg の活動紹介プレゼンテーション
- ミリマ国立公園訪問
- コミュニティ・ディナー
- ンガムーワレム（Ngamoowalem: オード川下流域およびアイバンホーレンジ）とダラム（Darram: 分流ダム）への現地視察 — 解説サイン設置エリアの見学
- ミリウング語教育プログラム訪問— 各学年における「Language Nest」セッションへの参加
- 協働内容、マーケティング、およびプロジェクト推進について協議するための MDWg 運営陣との正式会議
- ワリンガリ・アボリジナル・アーツ（Waringarri Aboriginal Arts: WAA）訪問およびカントリー見学
- ワルライ（地中オープンによる伝統的調理）を含むコロボリー・ナイトへの参加
- メディア対応 — Waringarri Radio（The Voice of the East Kimberley）および ABC Kimberley によるインタビュー
- ウポポイおよび FFAC の活動に関する一般向けプレゼンテーション
- アーガイル湖およびガルジバ（Galjiba: モリー・スプリング）への現地視察
- カナナラ湖でのボートクルーズ

2025 年 4 月 3 日に開催された一般向けプレゼンテーションは、「国立アイヌ民族博物館および国立民族共生公園におけるアイヌ語の再興と継承のための取組と事業」と題され、地域社会から多くの参加者が出席しました。プレゼンテーション終了後には、質疑応答および参加者同士の非公式な交流の時間も設けられました。プレゼンテーションの要旨は以下のとおりです。

本発表では、アイヌ語の再興および継承に向けた私たちの取組と事業について紹介します。アイヌ民族は、日本列島北部および北海道、東北、樺太、千島列島などの周辺地域に暮らしてきた先住民族です。アイヌ語は日本語の方言ではなく、日本語とは大きく異なる言語です。19 世紀中頃、日本の同化政策により、アイヌ民族の多くの慣習が禁止されました。これには、川でのサケ・マス漁、毒矢を用いた狩猟などが含まれます。そのような厳しい状況のもとで、アイヌの親たちが子どもたちにアイヌ語を教えなくなったことから、アイヌ語話者の数も減少しました。ウポポイ（国立アイヌ民族博物館・国立民族共生公園）では、アイヌ語が主要言語となっています。2020 年の開設に向けて、アイヌ語による案内表示の整備や解説文の作成にの取り組むとともに、来訪者向けのアイヌ語プログラムを準備しました。本発表では、これまでの経験や計画を踏まえつつ、アイヌ語再興に向けた準備および現在の取り組み状況について紹介します。

2. ミリウング代表団による北海道訪問

MDWg 代表団によるアイヌコミュニティ訪問は、2025 年 6 月 6 日から 16 日にかけて実施されました。ミリマ評議会の CEO であるクヌート・J・オラウスキー博士には、ミリウングの次世代リーダー

ーであるイマラ・テイラー＝ハナン氏およびオフィスマネージャーのトレイシー・ストレンジャー氏が同行しました。

訪問時の代表団メンバーのプロフィールを以下に示します。

イマラ・テイラー・ハナン（語学教師）

イマラ・テイラー・ハナンは 2023 年 10 月からミリマ言語文化センターでミリウング語の教師として働いています。ミリウング語を流暢に話せるようになることを目指しており、子どもたちに教えるミリウング語を強化するために新しい単語を学ぶことを楽しんでます。イマラは子どもたちと一緒に過ごすのが大好きです。「みんなで一緒にインタラクティブなゲームに参加するのはとても楽しく」、ミリウング語を学ぶのにも最適な方法だと言います。

クヌート・オラウスキー（最高経営責任者, 上級言語学者）

クヌート・オラウスキー博士は、2005 年から MDWg の上級言語学者兼マネージャーを務めています。ミリウング族とガジラベング族の人々と共に、彼らの伝統的な言語と文化の保存と復興に取り組んでいます。伝統的長老で構成される統治委員会と緊密に連携し、オラウスキー博士はミリウング語復興のための様々な戦略を主導しており、その中にはオーストラリアにとって非常に革新的なものも含まれています。ミリウング語の維持と復興を支援する彼の取り組みには、師弟制度、ミリウング語ネストの設立、その他の活動などが含まれます。言語学者として、オラウスキー博士はガーナとペルーの先住民言語の文法書を出版しています。現在は、チームメンバーと共にミリウング語の文法の解明に取り組んでいます。オラウスキー博士はデュッセルドルフ大学（ドイツ）で修士号と博士号を取得しており、カリフォルニア大学バークレー校（米国）および言語類型論研究センター（メルボルン、ラ・トローブ大学）で博士研究員を務めた経験があります。

トレイシー・ストレンジャー（オフィスマネージャー）

トレイシー・ストレンジャーは、伝統文化と言語、特にコミュニケーションの仕方を含む生物多様性の歴史、生態学、持続可能性に関心を持っています。彼女は人間の脳と、私たちがどのように知覚し、解釈するかに強い関心があり、メンタルヘルスとコミュニケーション、そして言語が様々な形でいかに重要であるかを理解するために、長期間の研究を行ってきました。トレイシーは、バッチハ応用科学（微生物学）、マーケティングの大学院ディプロマ、神経科学の資格を取得しています。彼女は、古代の聖地であるキンバリー地域に惹かれました。調和して生きるためには、ミリウング族の言語と物語に織り込まれた豊かな文化を受け入れなければなりません。トレイシーは、MDWg がミリウングの言語と文化を再活性化し、言語センターの日常運営を円滑にするために行っている数多くのコミュニティ活動において、MDWg の理事会と経営陣、そしてミリウング語学教師たちと協力し、支援できることに非常に感謝しています。

日本滞在中の活動は以下の通りでした。

- 札幌にて、FFAC の幹部および主要職員との公式会合
- 札幌の北海道大学におけるプレゼンテーション
- 白老のウポポイ（国立アイヌ民族博物館・国立民族共生公園）における言語・文化活動の視察
- ウポポイにおけるプレゼンテーション
- 二風谷のアイヌ文化博物館訪問
- 二風谷におけるプレゼンテーション
- 二風谷における戦略についての非公式な意見交換
- 二風谷小学校校長との会談および意見交換
- 登別ビジターセンターとジオパークの視察

3 回にわたり実施されたプレゼンテーションでは、MDWg における活動および戦略に加え、ミリウング族とアイヌ民族のコミュニティ間におけるさらなる協力の可能性に焦点を当てました。日本で使用した要旨を以下に示します。

ミリマ・ダワン・ウラブゲリング言語文化センター、 カナナラ（西オーストラリア州）

www.mirima.org.au

info@mirima.org.au

クヌート・J・オラウスキー

イマラ・テイラー＝ハナン

トレイシー・ストレンジャー

絶滅危惧言語の保存：ミリウング族とアイヌ民族の共同活動

このプレゼンテーションでは、ミリウング・アイヌ言語文化交流プロジェクト (MALCEP) の側面を振り返り、言語の絶滅の危機という世界的な文脈の中で、ミリマ言語センター（ミリマ・ダワン・ウラブゲリング言語文化センター (MDWg)）の活動に焦点を当てます。

まず、消滅の危機にある言語の問題、危機の度合いに関する定義と分類、現在の状況に寄与する要因、そして言語を消滅の危機から救うための一般的な戦略について概説します。オーストラリアの諸言語は言語復興のモデルの一つであり、第 2 章ではこのアプローチを紹介します。第 2 章では、言語センターの活動例としてミリマ言語センターの活動に焦点を当て、その活動について詳しく説明します。

ミリウング族とアイヌ民族の活動を結びつける試みとして、私たちは、私たちの活動を推進し、当局を巻き込み、私たちの言語を未来の世代に残していくための成功戦略を共有することで、両グループが協力し、互いに支援し合うことができる方法についてのビジョンも共有します。

プレゼンテーションで使用したスライド資料は、ご要望に応じて提供可能です。スライドには日本語の要約が含まれており、説明は通訳者により日本語で行われました。

プロジェクトの成果および知見

本プロジェクトは、双方が互いに学び合うことを目的としているため、その重点は知識交流に加え、交流を通じて新たに得られた知見を、ミリウング語およびアイヌ語コミュニティにおける現在の言語再興活動の発展にどのように活かしていくかに置かれています。

交流を通じた全体的な所見（特に MDWg 代表团によるアイヌの地への訪問に焦点を当てて）

公益財団法人アイヌ民族文化財団（FFAC）の本部およびウポポイ国立アイヌ民族博物館・国立民族共生公園を訪問し、私たちは以下の知見を得ました。

- FFAC は非常に優れた組織であり、約 200 名を雇用しています。そのうち 40 名は札幌、160 名はウポポイに勤務しています。ウポポイは FFAC の一般向け拠点として機能しており、アイヌ民族の文化的アイデンティティを伝えるために設立された施設です。
- 日本政府は、ウポポイの施設整備および建設に多大な投資を行っており、美しい自然環境と伝統的景観の中に、多様な建物が配置されています。
- 施設は高い機能性と魅力を兼ね備えており、導入されている技術も現代の最高水準に基づくものです。
- アイヌ文化・言語・アイデンティティのさまざまな側面を来訪者に伝えるため、革新的なメディアやインタラクティブな体験を活用した展示が用意されています。
- アイヌ語はウポポイにおいて広く用いられており、多様な活動、展示、メディアを通じて、来訪者の関心を引き出す工夫がなされています。
- 来訪者は、アイヌ語が日本語とは大きく異なる言語であることを実感しながら帰路につきます。また、アイヌ語の単語や表現をいくつか学ぶ機会もあるかもしれません。
- 来訪者は、アイヌ民族が独自の文化的・言語的アイデンティティを有していることなどを学ぶことができ、そうした内容は前向きかつ魅力的な形で紹介されています。

二つのプログラムにおける共通点と相違点

それぞれの組織（MDWg および FFAC）の活動を観察すると、両プログラムおよび両コミュニティの間には、相違点よりも多くの共通点が見られます。調査結果の概要を以下に示します。

要素	共通点	相違点
外部要因		
歴史	両コミュニティとも、植民地化の影響を受けてきました。	日本の主流文化がアイヌ文化に及ぼした影響は、比較的早い時期から見られ、その結果、同化の度合いも高くなっています。
適切な言語政策の欠如	日本政府および西オーストラリア州政府のいずれも、先住民言語（アイヌ語およびミリウング語）を正式に承認された言語政策によって保護していません。	西オーストラリア州政府は現在、先住民族の言語グループと協力しながら言語政策を策定する意向を示しています。
国内における位置づけおよび認知度	両コミュニティはいずれも、一般社会における認知度が十分とは言えず、メディアや政府レベルにおいて十分な注目や理解を得ることに苦慮しています。両コミュニティは、主流社会の中で十分な認知や理解を得られないまま、周縁化されてきました。	人口規模には大きな差があります。アイヌ民族の人口は少なくとも2万人以上（その数倍に上る可能性もある）とされていますが、ミリウング族の人口は約1,500人と推定されています。 文化的背景という点では、日本とオーストラリアの「主流文化」は大きく異なり、複雑な相違点が多くあります。
言語の活力	両言語は現在、言語活力スケール上の低位に位置しています（EGIDS スケールのレベル 8b）。	
内部要因		
組織構造および目的	両組織とも、自らの言語の再興に向けて強い意欲と使命感を持っています。	FFAC は大規模な組織である一方、MDWg は小規模な法人です。 FFAC は政府支援を受ける組織である一方、MDWg はアボリジナル法人であり、慈善団体として認定された非営利組織です。
政府資金への依存	両組織とも、それぞれの政府からの助成金に大きく依存しています。	FFAC の主な収入源は政府による単一財源ですが、MDWg は複数の政府部局や機関からの期間限定プロジェクト助成に加え、自主事業収入や寄付を通じて、収入の確保に努めています。
文化的アイデンティティ	両コミュニティとも、文化的アイデンティティを強く自覚しています。	

要素	共通点	相違点
コミュニティにおける言語意識	両コミュニティにおいて、多くの人々は言語再興を優先事項としていません。	ミリウング族のコミュニティでは、ミリウング語を教えることができる人に一定の制限が設けられている一方で、アイヌのコミュニティではより柔軟な姿勢が取られており、日本人も言語教育に関わることが認められています。
特定の個人による積極的な関与	両コミュニティには、言語再興を推進する中心的人物が存在しています。	
先住民族と非先住民族の協働	両コミュニティにおいて、互いに協力し合う姿勢が見られます。日本人はアイヌの取り組みを支援しており、その支援のあり方は、非先住民のオーストラリア人がミリウングの人々の活動を支援している状況と共通しています。	
戦略		
言語再興戦略	両組織とも、自らの言語を再興するためのさまざまな戦略について調査・検討を行っており、言語イマージョンモデルが効果的で有効なアプローチであるとの認識で一致しています。これには、ラジオ番組、地域向け語学講座、ならびに公共標識などが含まれます。	MDWg における言語再興活動は、ラジオ番組、地域向け語学講座、文化理解プログラム、公共標識、さらには公共生活の特定分野に対応した個別プロジェクトなど、多様な取り組みを含んでいる点で、より多角的に展開されているように見受けられます。
言語教育	両組織とも、教育現場への言語学習の導入を目指しています。	MDWg は地域の学校と非常に密接に連携しており、ミリウング語はカリキュラムの一部として正式な科目として位置付けられています。一方で、アイヌ語は一部の学校において限られた範囲で教えられています。
リソース	両言語は、少なくとも一定の程度において、言語記録資料や教育教材、学習資源に支えられています。	

アイヌ語再興プログラムから得られた知見

MDWg 代表団のメンバーは、今回の訪問を通じて多くの重要な学びを得ました。

- 代表団のメンバーは、ウポポイにおける展示物や活動の質の高さ、および FFAc の組織規模の大きさに深い感銘を受けました。
- ウポポイの施設は非常に効率的に機能しており、博物館として本来果たすべき役割を十分に担っています。
- 私たちは、大型映像スクリーン、インタラクティブパネル、インタラクティブゲームなどの技術の一部を導入したいと考えています。
- 一般市民が利用できる専用施設の存在は非常に有意義であり、カナナラに文化センターが設立される際には、ミリウング語が同様の形で紹介されるようにしたいと考えています。適切な時期が来れば、そのような施設および関連技術の開発手法について、ウポポイからさらに詳しく学びたいと考えています。

MDWg はアイヌのコミュニティに何を提供できるか

私たちは、アイヌ語が日常的なコミュニケーション手段としての使用から、コミュニティ内において高い象徴的機能を担うものへと移行しつつあることを確認しました。また、その象徴的価値は、ウポポイを通じて非常に効果的に発信されています。この点は、私たちにとって、アイヌ語コミュニティが今後検討していくことが考えられるいくつかの問いを提起しています。

1. アイヌ語タスクフォースの存在について学んだこと

- アイヌ語タスクフォースは、コミュニティの大部分にどの程度まで到達しているのか？
- アイヌ語タスクフォースは、アイヌ語コミュニティを代表しているのか？
- 他に言語に関して権限を有する機関はあるのか？
- アイヌ語分野に複数の団体や主体が存在する場合、それらがどの程度連携できるのか？

2. MDWg は、コミュニティおよび言語再興分野の専門家と連携しながら、広範な言語計画を実施してきました。このプロセスは、私たちが現状を明確に把握し、目標を設定し、それらの目標に沿った戦略を策定する上で大きく役立っています。もしアイヌコミュニティが言語計画の策定を希望する場合、私たちは喜んで支援を提供したいと考えています。

以上は現時点での初期的な考察ですが、これまでに開発してきた言語計画資料の一部について、必要に応じて共有したいと考えています。

協働による成果

私たちは、以下の方法により、協力関係をさらに強化・発展させていくことで合意しました。

1. 私たちの協働の目的を説明する共同声明を作成し、英語および日本語で各ウェブサイトに掲載すること。この作業はすでに完了しており、各ウェブページは以下から閲覧可能です。

<https://mirima.org.au/news-events/news/>

https://www.ff-ainu.or.jp/web/potal_site/details/miriwoong-ainu.en.html

2. MDWg は本交流を記録する映像を制作し、FFAC/ウポポイと共有すること。この作業は現在進行中です。
3. MDWg は、本交流の成果を広く発信するため、オーストラリアの各種メディア機関と連携してきました。

私たちは、上記の取り組みを、両コミュニティ間における持続的かつ発展的なパートナーシップの始まりと位置づけています。

両組織の規模には明確な違いがある一方で、活動範囲や対象とするグループには多くの共通点があります。私たちは、MDWg が言語計画および言語復興戦略に関して有益な助言を提供できると考えています。

私たちは、アイヌのコミュニティにおいても、ある程度の地域的な調整を加えることで、オーストラリア型の言語センターから恩恵を受ける可能性があると考えています。このようなセンターの設立が実現した場合には、コンサルティングや助言を通じて、そのプロセスを支援させていただきたいと考えています。

現在は、追加的な政府支援の獲得に向けた働きかけを行う上で、適切な時期であると考えられます。これは、「国際先住民族言語の 10 年」が、言語復興に関する意思決定のための適切な枠組みを提供しているためです。

謝辞

本プロジェクトの実施にあたり、多大なる時間と労力、そして温かいご厚意を賜りました日本側関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。皆様のご支援により、本交流事業は大変有意義で忘れがたい経験となりました。特に、以下の皆様に深く感謝の意を表します。

- 常本 照樹 名誉教授 - 公益財団法人アイヌ民族文化財団 理事長
- 村木 美幸氏 - ウポポイ本部 運営本部長
- 深澤 美香博士 - ウポポイ（国立アイヌ民族博物館・国立民族共生公園）研究員
- 山丸 賢雄氏 - ウポポイ（国立アイヌ民族博物館・国立民族共生公園）文化振興部 アイヌ語講師
- 上田しのぶ氏 - 公益財団法人アイヌ民族文化財団 調整事務局 事務担当
- 関根 健司氏 - 平取町役場 アイヌ語講師 ならびにそのご家族の皆様

本プロジェクトは、オーストラリア外務貿易省（DFAT）より、豪日交流基金を通じてご提供いただいた助成金により実現したものです。

また、地域および関係機関のパートナーならびにスポンサーの皆様から賜りました多大なるご支援とご厚意にも深く感謝申し上げます。資金面および現物支援の両面にわたる皆様の極めて重要なご協力により、本プロジェクトにおける不足を補うことができました。

